

「自分のために働く」ことを教える

05' 3. 18. 木村 周

キャリア形成における教育、職業行政、企業の連携

キャリア・コンサルティングとは

「労働者が、その適性や職業経験等に応じて自ら職業生活設計を行い、これに即した職業選択や職業訓練等の職業能力開発を効果的に行うことが出来るよう、労働者の希望に応じて実施される相談をいう」（2001年第7次職業能力開発基本計画）

参考 キャリア・コンサルタント試験に係る能力基準項目（2002年厚生労働省）

- (1) キャリア・コンサルティングの社会的な意義に関する理解
社会・経済動向、必要性、役割と位置づけ、任務の範囲
- (2) キャリア・コンサルティングの基本的知識・スキル
基本的知識（理論、手法、情報理論・収集・作成、雇用管理・労働条件、労働法・社会保障法、メンタルヘルス、ライフステージ・発達課題、転機の受け止め方）
基本的スキル（必要性、キャリア・シート、カウンセリング、グループ・カウンセリング、相談プロセス・マネジメント）
- (3) キャリア・コンサルティングの実施過程において必要なスキル
相談場面の設定、自己理解、仕事理解、啓発的経験、意志決定、方策の実行、適応支援、相談過程の総括
- (4) キャリア・コンサルティングの効果的実施に係る能力
社会への普及、ネットワーク、自己研鑽・スーパービジョン

学校教育に「働くこと」を取り戻す

～学生・生徒に「働くことの意味」を「考え、体験し、それを自分のモノにさせる」～

自分本位と他人本意

「豆腐屋は自分のために豆腐を作っているのではなく、他人のために豆腐を作っている。その豆腐を売った利益で自らの生活を立てている。人のためにしたことが同時に自分のためになっている。自分のためにする仕事と人のためにする仕事の分量は同じである（要旨）」

（夏目漱石 1911年「道楽と職業」 漱石文芸論集 岩波文庫）

専門分化と分業

「今日本に職業が何種類あって、それが昔に比べてどの位の数に増えているかということを知っている人はおそらくないだろう。私は大学に職業学という講座が必要だと考えている。」

「開化の潮流が進めば進むほど、また職業の性質が分かれば分かれるほど、我々偏った人間になってしまう。社会的知識が狭く細く切りつめられるので、あたかも自ら好んで偏る結果になるので、大きく云えば現代の文明は完全な人間を日々偏った人間にする（要旨）」

（夏目漱石 前出）

労働の成熟

「経験を通じて仕事が自分の中に受け入れられ、それが他人事としてではなく自らの内部で生きはじめたとき、ようやく彼は仕事の場で一人前の人間として歩み始める。中略、年齢に応じて肉体が成長していくように、また肉体の成長につれて性の意識が目覚めてくるように、一人の人間の内部で労働が成熟に向けて動き始める」

(黒井千次 1982年「働くということ」 講談社現代新書)

労働にかりたてるもの

「シェーホフは、たとえいま護衛兵に犬をけしかけられたとしても、ちょっとうしろへさがって、仕事のできばえを一目眺めずにはいられなかった。うむ、悪くない。今度は壁に近づいて、右から左からと、壁の線をたしかめる。さあ、この片目が水準器だ。ぴったりだ。まだこの腕も老いぼれぢやいな」

(A・ソルジェニーチン 1963年「イワン・デニーソビッチの一日」 新潮文庫)

仕事人が人をつくる

「人は働きながら、その人となってゆく。人格を形成するといっちは大袈裟だけれど、その人がどんな仕事をして働いてきたかと、その人がどんな人であるかを切り離して考えることはできない」

(小関智弘 2001年「仕事人が人をつくる」 岩波新書)

写真展「Nurse 私は看護師」のその後

ではどうすればよいのか～「自分のために働く」～

「自分のために働く」とは

労働の内容に手応えがあること。単に忍耐を要するだけでなく、適当な変化があること
仕事から学ぶことがあること。継続的に妥当な量の学習があること
自分で判断する余地があること。自分の責任で考え、決められること
人間的なつながりがあること。同じ職場の人々が互いに他人を認め合う関係にあること
仕事に社会的意義を感じられること。自分の労働を社会につなげて考えられること
将来にとってプラスになること。なんらかの意味でよき将来につながることを

「自分は何者か、それを自分自身が認め、受け入れ、それを他人にも認めさせるものは、広い意味の働くことの中にある。余暇や趣味は、現在のところ労働にとって代わってはいない」と私は考える

以上